「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して　私は用語について煩悶すること」論

前田貞昭

はじめに

郷里の奇妙な呼称習慣に取材した井伏鱒二の作品「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」（『若草』一九三七年一一月）は、「私」の郷里の呼称習慣の「事実」を説明するという場から、やがて、「私」によって「仮定」された「虚構」の物語の場に移行する。標題に即して言えば、＜「私」が用語について煩悶する物語＞の内部に、＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞が虚構される。この作品の題材である呼称習慣については、井伏の郷里で実際に行われていた呼称習慣として井伏は何度かエッセイに書いている。[1] エッセイが一応事実を事実として述べるものであるとすれば、そのような事実を扱うエッセイの次元から、一個の小説へと飛躍させているのが、この作中の「私」による「仮定」である。このように考えると、この「仮定」（虚構）された＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞によって、何が付け加えられたのかを解明することが、この作品を小説として論じるのに最も相応しいことだと言ってよいだろう。本稿では、そこに関わってゆく「私」という一人称回想体の語り手の問題を中心に考察を加えてみようと思う。

一　癒着する「私」

作品は、「私」が子供の頃、両親を「トトサン」／「カカサン」と古風に呼ぶようにしつけられたまま別の呼び方にも変えられず、いまだにどうにも困惑しているという記述から始まる。「私」の両親の呼び方は特別に古風だったが、「私」の郷里の村では、戸主の自負に従って両親の呼び方が違っていた。そればかりではなく、村人たちが互いを呼ぶときの接尾語が、村内の階層に対応するかたちで明確に区別されていた。――これらのことが、作中事実として「私」の口から語られる。両親を呼ぶときには、「オットサン」／「オッカサン」、「オトッツァン」／「オカカン」、「オトウヤン」／「オカアヤン」、「オトッツァ」／「オカカ」という呼び方があり、村人が互いを呼びあうときには、「××サン」、「××ツァン」、「××ヤン」、「××ツァ」、「××サ」という呼び方があった。しかも、家族間の呼称習慣と村人同士の呼称習慣のいずれも、地主、村会議員・顔役、自作農、小作人という村内の階層に画然と対応していた、と「私」は説明する。ここまでは問題にするべき

点はない。ここに記述されているのは、先に触れたように、井伏の郷里で実際に行われていた呼称習慣であったらしいが、ここでは、一応作中事実と見なしておこう。

このような村落内の呼称習慣の説明に引き続いて、その呼称をめぐって村人たちの間で起こった争いを語るべく、次のような「仮定」がなされる。この「仮定」から＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞が始まるのであるが、私が取り上げたい問題も、この「仮定する」ということばから始まる。

たとへば子供のとき「槌ツァ」と言はれてゐた人は、成人して村会議員になつても「槌ツァ」である。倉を建て、さうして薄荷相場で大儲けをしても「槌ツァ」は死ぬまで「槌ツァ」である。ところが「槌ツァ」は自分が「槌ツァ」と言はれるのが苦労の種で、「槌サン」と言はれたい希望があると仮定する。彼にはさういふ名誉欲があると仮定する。そして「槌ツァ」は因果な性分の男であると仮定する。さうすると村長が村会議員の会合のとき、「槌ツァ」のことを「槌ツァ」と呼ぶと「槌ツァ」は村長に喰つてかかる。　（引用は初出に拠り、傍線は前田が付した。以下同様）

「仮定する」という一語によって、この作品は、「私」の郷里の呼称習慣の「事実」を説明するという場から、作中の「私」が設定した「虚構」の場に移行する（これより以前に、小作人が金を貯めて家庭内の呼称を改めるという箇所で「仮定する」という語が使用されている。しかし、そこでの「仮定」は例示の次元にとどまっていて、物語を構築するまでは行かないし、語り手「私」と「仮定」の物語との関係をいえば、その「仮定」の話の中に語り手「私」が登場するということもない）。すなわち、作品は、＜「私」が用語について煩悶する物語＞の位相から、「私」が「仮定」した＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞の位相に転位する。

この「仮定」以降、読者は、作中に虚構された＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞を聞かされるということになる。だが、そういう前提に立って、この＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞に入って行くと、奇妙な叙述が目につく。そもそも、過去の「事実」が叙述されるのではないから、「仮定」するということばが使われる。「私」が「仮定」した話である以上は、いま、この虚構の物語を「仮定」し、語っている「私」の過去が、そこに「事実」として語られる筈はない。ところが、読者は次に引用するような部分に出会うのだ。

私たちは「槌ツァのうちでは、何やらずゐぶん里の言葉をつかふさうぢや」といふので、槌ツァのうちへ試しにそれをききに行つてみた。なにげなく遊びに行つたやうな按配で「利太ヤン」「達ツァン」「宇サン」「定サ」などと竹馬に打ち乗つて行つてみた。（略）私たちは「槌ツァ」のうちの庭を竹馬で歩きまはつた。庭土は湿つてゐて柔らかく、竹馬で歩くには好都合であつた。

少なくともこの引用部分が、事件の現場に居合わせた村童の一人である「私」の体験談として語られていることは疑えない。右の引用部分のように直接「私」が姿を現さないにしても、他の部分でも、「私と同級生」・「私の村」・「私のうち」・「私の祖父」など、「私」の体験であることを明示することばが頻繁に使われている。すなわち、「仮定」（虚構）された筈の＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞そ

れ自体が、「私」の体験談として語られるという事態に出会う。

「私」の語りの進行とともに、いつしか「仮定」から出発したことが置き去りにされてしまうのである。それは、作品に亀裂を生じさせずには済ませない。作品は次のように幕を閉じていた。

この強盗事件で思ひがけない打撃を受けたのは「九郎治ツァン」であつた。それ以来「九郎治ツァン」の一家は東京弁をつかはなくなつた。「槌ツァ」のうちでも大阪弁をつかはなくなつた。せつかく移入されかけてゐた大都会の言葉は私の村から消え去つた。そして「オトッツァ」「オカカ」「オトウヤン」「オカアヤン」「オトッツァン」「オカカン」といふ用語は、百年たつても消え去らないやうに思はれた。

私は煩悶した。地球が逆に回転するやうな大異変でも起らないかぎり、「カカサン」といふ用語など断じて復興しないだらう。古風ならば古風に何とか一工夫して、せめて「母者ひと」でも「たらちね」でもいい、もすこし格好のつく用語を仕込んでもらひたかつたと、私はそればかり気に病んでゐた。そのころの私の唯一の悩みはそれであつた。

この引用中の第二段落の「私」の絶望（母の呼称を変えられない）は、先にある第一段落の叙述（「槌ツァ」の試みの破綻）を受けて成立している。「私」が「煩悶」する原因は、「仮定」された虚構空間内部に存在していた。当然、変えられない用語に悩む「私」も、「仮定」された虚構の「私」であるとしなければなるまい。

ところが、必ずしも「私」は、虚構空間内部の「私」であるとも言い切れないのである。問題にしているのは作品末尾部分である。右に引用した二つの形式段落の内、第二段落は、その直前の段落を受けると同時に、作品末尾を占めていることによって、先行する作品全ての叙述を受けて、作品を締め括る役割を担わされている。事実、引用第二段落、分けても作品最末尾に当たる段落最後の一文は、作品全体の首尾の照応関係を喚起するように働いている。その作品全体の首尾の照応関係を辿ってみよう。

作品は、

私は子供のとき自分の両親を「オトウサン」「オカアサン」と呼ばなかつた。まことに古風な用語だが「トトサン」「カカサン」と呼んでゐた。

と、両親に対する呼称のことで「煩悶」する「私」のことから語り始められ、

自分の理性では、時流に即し「オツカサン」と呼ぶべきだと思ひながら、気恥かしくて「オツカサン」とは言へないのである。当時、これが私の唯一の悩みであつた。

と、両親の呼称についての話題が、「私」の「煩悶」に引き寄せて纏められていた。

改めて言うまでもなく、右の部分の叙述は、「仮定」の物語が始まる以前の「私」についてなされたものである。冒頭から始められた一連の記述を総括する、傍線部分「当時、これが私の唯一の悩みであつた」という一文の形式・内容の双方は、いま問題にしている、作品最後の一文「そのころの私の唯一の悩みはそれであつた」と照応し、逆に、作品最末尾の一文は、先行する「当時、これが私の唯一の悩みであつた」という一文を喚起することを要求する。この要求に素直に従えば、「そ

のころの私の唯一の悩みはそれであつた」という「私」は、作中に設定された虚構の外側にいて、この＜「槌ッァ」と「九郎治ッァン」が喧嘩する物語＞を「仮定」した「私」でなければならない。とすると、先に述べた「私」の位置とは矛盾を来すのである。

以上に述べてきた現象は、作品の叙述構造それ自体が抱えている捻れであるとしなければなるまい。「私」に焦点を合わせて述べれば、「仮定」された物語の内部に登場させられて叙述対象となった「私」は、やがて、「仮定」する主体の「私」の過去の領域を浸蝕し、二つの「私」は癒着してしまう。その結果、作品全体を見渡せば、「私」は、「仮定」された虚構の物語中の「私」であると同時に、また、「仮定」した主体としての「私」でもあるし、そして、その「私」は「仮定」物語に語られた「私」の過去をも背負い込まなければならない。

奇妙といえば、もう一つ、作品末尾には、奇妙な論理がある。そもそも、同じ村落共同体で行われている呼称習慣とはいえ、「槌ッァ」が提起したのは村人同士で行われる呼称の問題であり、作品最終段落に述べられているのは「私」の母に対する呼称の問題であって、その次元が異なる。村人間の呼称習慣は改められなかったが、家族内での呼称習慣は、「私」を羨しがらせた石神井小二郎にしろ、「槌ッァ」や「九郎治ッァン」にしろたやすく改めているのである。ところが、作品最終段落に見られるのは、そういう呼称習慣の場の相違に目を背け、村人間の呼称習慣の問題と家族間の呼称習慣とを同じように牢固として消え去らない呼称習慣として一括りに受け止める「私」の絶望感のごときものである。やはり、ここにも、作中の二つの「私」の亀裂に由来する論理の混濁があるといわなければならない。

以上指摘した点は、いずれも、＜「私」が用語について煩悶する物語＞と＜「槌ッァ」と「九郎治ッァン」が喧嘩する物語＞とを結び付けようとするところで出現する。標題の『「槌ッァ」と「九郎治ッァン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること』は、この作品が二つの物語を内包していることを示唆しているが、その二つの物語の結節点において、私が指摘してきた問題は生じてきているわけである。

何故に、このような捻れや亀裂を生じさせてまで＜「私」が用語について煩悶する物語＞と＜「槌ッァ」と「九郎治ッァン」が喧嘩する物語＞とを接合させ、「仮定」する「私」が、「仮定」された「私」の過去をも背負わなければならなかったのか。その問いに答えるには、物語の形式次元にとどまっていては困難だ。そろそろ、その内容を検証しなければなるまい。

二　因習としての呼称習慣

「仮定」の物語に語られた「槌ッァ」は、「私」の村の呼称習慣に挑戦し、村内に波紋を引き起こす。政治的・経済的実力を自分のものにした「槌ッァ」は、現在の地位に相応しく「槌サン」と呼ばれたいと願う。村落共同体内部での地位を承認してほしいという欲望に突き動かされていた「槌ッァ」は、公式の場で「槌ッァ」と呼んだ村長の「九郎治ッァン」に挑戦する。しかし、「槌ッァ」の様々な行為は、表層に現れた部分においては呼称習慣を問題にしているが、根のところでは「九郎治ッァン」に対する遺恨に由来するものであった。だから、「槌ッァ」と「九郎治ッァン」との喧嘩は泥試合的な様相を呈した上に、「九郎治ッァン」が矛を収めれば、「槌ッァ」も撤退してしまう。この

喧嘩は、「槌ッァ」と「九郎治ッァン」との感情的対立に起因するもので、呼称習慣はその争いの具にされたに過ぎなかったし、また、「槌ッァ」の試みは失敗に帰した。しかし、そういう一面を持ちつつも、また、別の一面においては、旧来の秩序を維持しようとする村落共同体の保守的なエートスに果敢に挑戦したのが「槌ッァ」の試みだった、と言ってよいだろう。事実、「私」が見ているのは、「槌ッァ」の試みが結果的にもたらす農村近代化の側面である。

村人同士の呼称習慣は、どんな階層の家に生まれたかということを、そのまま反映したものである。「槌ッァ」の娘は「お花ヤン」と呼ばれ、「九郎治ッァン」の娘は「お小夜サン」と呼ばれている。「ッァ」から「ヤン」へ、あるいは「ッァン」から「サン」へと、それぞれの娘たちの世代では、親の世代よりも一つずつ上の階層の呼称に移行していることが作中には示されている。そういうかたちで、村落内の変化に対応していないわけではない。しかし、各個人にとってみれば、各自が生まれた家がその時に村落共同体内でどのような階層にあったかという過去から逃れられない制度である。別の言い方をすると、ここでは、呼称習慣に残された過去と、現在の位置との間で生じた時間的ズレ（タイムラグ）は解消され得ない。

村落共同体内部に階層移動がなくて安定している場合には、このようなタイムラグは生じない。すなわち呼称習慣そのものが、変動のない停滞した社会を前提としていたわけで、そこでは最初からタイムラグが生じることは予定されていないし、言うまでもなくタイムラグに起因する不満を取り込める十分な柔軟性も備えてはいない（もしあるとしても、それは、各個人の持つ不満がそれぞれの子の世代になってようやく解消されるという、緩慢で不十分なシステムでしかない。個人の意識が「家」意識に統合・吸収されていれば、緩慢で不十分ではあっても、それなりの機能を果たし得るが、個人の意識が「家」から突出してくるとそれは重大な欠陥として意識されるだろう）。その結果、ことばは過去に引き戻す力として作用し、出自という過去の影によって現在を規定しようとする。

このように見てくれば、呼称習慣を改変しようとする「槌ッァ」の試みは、社会的変動の現実をことばという象徴体系においても承認させようとしたわけで、「槌ッァ」たちの意図を別にすれば、村落共同体に温存された保守的エートスに対する挑戦であり、きわめて近代性を持った試みであった筈である。

村童時代の「私」も、また、そういう「槌ッァ」が田舎のことばを大都会のことばに置き換える行為に、村落共同体を都会化・近代化する契機を見ていたようだ。それは「仮定」された物語内部の村人たちの受け取り方も同じだ。「槌ッァ」と「九郎治ッァン」のどちらかに荷担するというような形で、村人たちは考えてはいない。「槌ッァ」たちの行為に関して「村の人たちは甲これを難ずれば乙これを駁すといふやうな有様」であり、「私のうちの祖父」は「時期尚早論」を唱えていたという。このような作中の記述に従う限り、村人たちは、「槌ッァ」が呼称習慣に関わる問題を提起したと捉えている。そういう点では、村人や「私」の認識は、「喧嘩」の当事者である、「槌ッァ」や「九郎治ッァン」の意識を超えているといえよう。

そういう呼称習慣から逃れることを願っているのは、「仮定」された虚構の物語の中の「私」だけではない。「仮定」の物語が始められる以

前においても、この呼称習慣を語る際には、「私」は、「時代おくれ」とか「古風」とか「時流に即する」とかいったように、近代的な匂いのする新しいものに価値があると判断し、時間系を価値系に置き換えて評価することばを多用している。たとえば、「私」は石神井小二郎の使った「オトッツァン」／「オカカン」ということばを羨んだのではなく、用語を改めるという「進取の気象を羨んだ」と説明していた。このような箇所から明らかなように、この話を「仮定」して語っている「私」自身も、「槌ツァ」の行為を呼称習慣を破ろうとする試みと見なしているのである。

三　「過去」を背負う「私」

それでは、この作品から、停滞した村落共同体への嫌悪と近代化への一方的な賛美が読み取れるかというと、決してそうではない。封建的遺制を全面的に否定し、村落共同体の制度の合理・不合理を考え、近代化の可能な方法を発見しようと試みる――このような近代的合理的思考によって作品世界が裁断されているのではない。

保守的なエートスが蟠踞する村落共同体の旧習を否定的に眺める「私」の意識が出現しはするが、他方、形式上の約束を破って「私」が＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞に入り込んだ結果、「私」は、「仮定」された物語中の過去をも背負った存在でもあらねばならない。そのとき、このような呼称習慣を持った村落共同体に生まれ育ったという逃れられない「私」の「過去」が、合理・不合理という近代主義的判断や善悪の倫理的判断を超えて存在し、また、それが、いま現にある「私」の記憶の深部に「私」を形成した世界として生きていることも否定しようのない「事実」として確認されるのである。それは、あの母の呼称に対する屈折した対処の仕方に端的に現れている。「私」は、いまもって「カカサン」という呼称への羞恥心が消えないために、別の呼び方をするわけではなく、その古風な用語を避けるという姑息な手段によって、自分の羞恥心との折り合いをつけているのだ。

「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」という作品を物珍しい習慣を綴った農村風俗誌に終わらせない最大の要因は、この二律背反的な事実とそれにまつわる「私」の感情の描出にある。それは、＜「私」が用語について煩悶する物語＞の内部に＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞を包み込み、「虚構」と「事実」との境界を破って、「私」が村落共同体の内側に生きた存在としての位置を与えられたことによって可能になっていた。

「仮定」された村童時代の「私」をも背負い込んで、この物語を語る「私」は存在し、そこに語られている、＜虚構＞された＜過去＞に拘束される。先に、「仮定」の物語内の「私」が、「仮定」した「私」の過去を浸蝕すると述べたのはこのことである。村人たちが村落共同体の内部に生きていたように、「仮定」された「私」のみならず、「仮定」する「私」の意識も、その「仮定」された「私」の延長上に、同様に呼称習慣に縛られて存在する。すなわち、「私」も呼称習慣という村落共同体内部の制度を生き、現在も、その拘束の下に作品世界を語ることを強制されるのである。

「私」が呼称習慣に縛られた存在であるということは、同時に、「私」の存在の根の部分が、そのような呼称習慣と共にあるということでも

ある。それは、差別的であれ封建的であれ、どのような呼び方で非難されようとも、「私」が「近代」以前の村落共同体に育ち、そこに少年時代の「私」が存在したという事実だ。たとえ封建的であるというレッテルを張られようが、そこに「私」の育った場があり、周囲との絆が存在したし、現在も存在する。「仮定」された「私」の「過去」は、こうして、現在の「私」を犯し、そして現在の「私」を縛る。それを象徴するのが母の呼称に思いめぐらす「私」の「煩悶」である。母の呼称とは母との絆を保証する機能を持つ。母から仕込まれた呼称によって母との繋がりは確保される。母から与えられた呼称をやめることは、母から「私」に与えられた、母との関係を「私」の側から切断することだ。だから、「私」は、「カカサン」という呼び方を避けることはしても、いまもって、別の呼称を採用することはできないのである。「槌ツァ」の家の庭を竹馬で踏んだときの「湿ってゐて柔らか」い感触は、「私」の記憶の底から、「利太ヤン」「達ツァン」「宇サン」「定サ」という呼び名を使うことによって、初めて友人たちと一緒に体験された生き生きとした時間の内に呼び戻される。この「差別的」な呼称は、友人の出身階層の多様性の証明ではない。友人たちとの体験は、「利太ヤン」「達ツァン」などといった呼称によってのみ確実に追想し得るのだ。「利太チャン」「達チャン」などと呼んだときには、その体験は別物になってしまう。いかに差別的であろうと、そういう呼称体系を含めた村落共同体全体の中に生まれ、生きたという宿命からは逃れ得ない。であればこそ「私」は母の呼称に困惑する。

村童時を回想する楽しげな筆致や、「お花ヤン」と「お小夜サン」との文通発覚事件も、そのような掛け替えのない「私」の少年時代の一要素として点綴されていた。そういう世界に生まれ、育ったのであって、呼称習慣を含めた全体として「私」の村落共同体は存在したと言わなければなるまい。

「私」が「仮定」された物語内世界の存在としてその内部空間に生きたように、この作品では設定されていた。すなわち、母に対する呼称に現れているように、「私」は村落共同体の呼称習慣から決して自由ではなく、そこに縛られている存在つまり村落共同体のエートスに拘束された存在として登場する。内部空間を生きるとは、そのように、作品世界内部を支配する関係の網の中に存在することであり、その関係の拘束に、意識や行為も限定されるということである。そのとき、作中世界は単なる認識や批評の対象という次元を超えて、その世界に生き続けることがいかに可能かという、作品世界内部に含まれた位置からの関わり方が問われることになろう。すなわち、村落共同体内部に取り込まれた者として規定された「私」は、その世界の内法に沿った論理や直観の有効性・妥当性を問わなければならない。そのとき、現実的有効性（それはもちろん作品内世界での現実的有効性である）を持たない、外側からの観念的な裁断を不毛だとして退けることが可能になるのである。逆にいえば、そこにおいて、「私」の認識と行為の出発すべき原点が据えられる。あるいは、所与の関係の絶対性から出発して、その内部で可能な思考や行為を展開しようとする、いわゆる庶民的意識が獲得されることになる。ここに、「私」が、単に「仮定」の物語を外側から語るのではなく、その「仮定」の物語の内部を生きた「私」として存在させられなければならなかった最大の理由がある。すなわち、『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について

煩悶すること」においては、作品世界内の諸関係の拘束の中に生きる「私」を媒介として、作品世界における認識や思考の座標軸の原点が設定されている。この場合、「私」は、作品世界を覗き見る単なるレンズではない。そのレンズは、作品世界内の諸関係に拘束されたレンズなのである。

封建的遺制が生き続ける現実の拘束から逃れて、観念や理念の領域で思考し批判する自由（それはどこにも所属しないという仮構によって得られた自由であった）を得た多くの近代日本の知識人は、その代償として、かれらの言説の有効性も往々にして観念や理念の次元にとどまるという欠陥を持ち、その言説が現実の諸関係の前に上滑りしがちであったことは否定できない。かれらは、現実の諸関係の拘束から逃れ、それを一挙に相対化する批判の自由を得たが、逆に、現実の座標軸に自己の定めるべき位置も喪失したのである。[2]「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」が、近代日本知識人のそうした陥穽から逃れて、庶民的なものに連続する要素を持つのは、そこに登場する「私」が、作品世界内の諸関係に拘束された視点を手に入れているからである。とすれば、観念的飛躍や論理の一人歩きを抑制し、そして、作品世界を支配する現実の拘束の内部から世界を見つめることを可能にするシステムのかなめに、このような「私」があると言ってよいだろう。少なくとも、「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」の「私」は、語り手とか舞台廻しという役割を超えて、作品世界内部の諸関係の拘束の中に視点を定める機能を担っており、それの視点の制約が観念的な言辞の侵入を排除するのである。現実の座標軸の内部にとどまって、そこで思考し行動するのが、いわゆる庶民であるとすれば、井伏文学の庶民性の表現機構の根はここにある、と言ってよいだろう。

四　媒介としての「私」

作中世界の事実は「私」の視点と意識を媒介として語られているが、この物語のプロットを支配し、それを構成する作者の批評的視点は、当然のことながら、作品世界内部の関係の拘束を離れている。作品世界内の諸関係に拘束されているのはあくまでも作中の「私」であり、作者は、その「私」をも対象化し得る地点、すなわち、作品世界の外部に立っている。この点について述べておかなければ、片岡懋[3]が指摘する、「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」が含む批評意識を取り落とすことになる。但し、急いで付け加えておかなければならないのは、作品世界内部の拘束を離れているとは言っても、「私」が語るという形式で語り進められてゆく以上は、表面上は、「私」が知り得た範囲を超えるものではないし（たとえば、「お花ヤン」と「お小夜サン」の文通事件の経緯は、あくまでも噂話として伝聞の形式で語られる）、そこに直接的な作者の批評的言辞が出現するわけでもないということだ。そういう「私」の視点の制約の中で、何を語るかというプロットを支配してゆくところで、作者の批評意識が出現するのである。

「槌ツァ」を動かす原動力は、「九郎治ツァン」への遺恨である。近代化の推進役であるはずの「槌ツァ」が、それに甚だ似つかわしくないことも作中には記述されている。「槌ツァ」の企ては、そもそも「槌ツァ」個人の社会的野心に基づいたものであった。それを用語の上で

承認しない「九郎治ッァン」への対立感情が、かれに呼称習慣への挑戦に向かわせたのであったし、社会的野心や名誉欲は地位に相応しい象徴を要求するわけで、呼称習慣を破壊して平準化してしまうことは「槌ッァ」の願いに反するだろう。「槌ッァ」は象徴体系そのものを破壊したいわけではない。「槌ッァ」の企ては、あくまでも、呼称習慣そのものは温存しておいて、その呼称習慣の枠内で上昇したいというだけのことである。だから、「槌ッァ」の企ても、結局のところは、呼称習慣に備わった階層性を無化しようとする革命ではありえない。つまりは、階層的区別の存立を願っている点では、「槌ッァ」も、きわめて保守的なエートスの持ち主である。

加えて、この「槌ッァ」は、ここに語られた「私」が是とするような近代化を担うに足りるような人物でもない。「槌ッァ」と「九郎治ッァン」との言語騒動の背後には、もう一つの大きな騒動が控えていたことが触れられている。

そのとき村長は、自分の失言を「槌ッァ」に謝ると事は無事におさまるが、「槌ッァと言ったのが悪いかのう」と反問すると面倒になる。或るとき、さういふ揉めごとから村長は恨みを買ひ、無実の罪を讒訴され、裁判所に連れて行かれた。

このように「槌ッァ」の歪み・否定面も怠りなく記述されているわけであって、感情に駆られて極端な行動に走る「槌ッァ」の性格的歪みが露骨に見えてくる。これら「槌ッァ」の性格やその行為を支える感情のありようは、「私」の語りを媒介としているが、プロットを構築してゆく作者によって作り上げられているものである。たとえば、右の引用中、「『槌ッァと言ったのが悪いかのう』と反問すると面倒になる」云々という部分、就中「面倒になる」という表現は明らかに、プロットを作り上げて行く機能を持っている。あるいは、「槌ッァ」を「名誉欲」の持ち主と規定したり、「因果な性分の男」と設定したりするのも同様である。これらの部分を語っているのは、作中物語を語って行く「私」とほとんど一体化した、物語を構築しようとする作者である。言語合戦に関わった「槌ッァ」の本質部分が見えているのは、虚構の物語を「仮定」する「私」を操って、あるときはプロットを作り、あるときは「槌ッァ」の負の部分をあたかも村内の噂話のように「私」に語らせる作者である。作者が直接姿を現して、その内容について露骨な評価を下すことはしないが、作中人物にどのような性格を与え、どのような噂話を語り、そして、それをどこに配置するかということは、作中の「私」を操る作者によってなされるのである。

以上のように検証してみれば、村落共同体内部では封建的な呼称習慣を否定して近代化しようという行為も、実はかなり怪しげな個人の欲求によって進められようとしたという皮肉（片岡が指摘するように、[4]村落共同体内部に位置する「槌ッァ」の試みは失敗し、外部から来た「学校の先生たち」によって成功したのである）、そして、近代化を願う「私」の存在の根の部分もそうした封建的な要素の中で形成され、さらには、「近代化」なるものがそれらを失わせるものであるという事実とそれに付随する感情――これらの複合した、村落共同体とその近代化をめぐる愛憎のアマルガムを、その村落共同体内部に生きる者の視点から描き出す際に、「私」が、「仮定」された物語中の「過去」を背負うことは必須条件であったし、そうしたものを描出したところにこの作品の価値を認めることができる。すなわち、作品の世界を外から

見るのではなく、内部から見るためには、作品世界の関係の網に拘束されるシステムが必要だったのであり、それが、空疎な観念性から救い、さらには、様々な関係に拘束されて生きる、いわゆる庶民の視点を保証することを可能にしたと言えよう。そして、「私」に与えられた拘束は、その「私」を媒介として作者の認識や批評意識が出現しなければならない以上、作者がこの作品世界の諸関係の外から観念的に批評することを抑制するように作用する。逆説的な言い方をすれば、井伏は現実の諸条件を超えた観念的追求や理念の提示を得意としない作家であるが、作品世界の関係に縛られた「私」を媒介とすることで、そうした作者の限界を限界ではなく、「私」の思考や認識の必然であるかのように思わせることが可能になるのである。これは、井伏の思考スタイルや資質に沿った巧妙な戦略であると評さなければなるまい。

以上、考察してきたように、＜「槌ツァ」と「九郎治ツァン」が喧嘩する物語＞が、語り手「私」の過去の体験談として語られた結果、「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」においては、奇妙な呼称習慣への関心といった単なる田舎風俗誌や井伏自身の少年時代の回想という次元を超えて、村落共同体内部から眺められた農村近代化の様相とともに、その内部を生きた者の村落共同体に対して抱いた愛憎半ばする感情がトータルに描かれ得たのである。

また、「虚構」の前提で出発したものが「私」の「体験談」のスタイルに変容したことは、井伏が虚構を事とするような客観小説スタイルよりも、体験談を語る／聞くというスタイルへ傾斜していることをよく現している。事実、井伏は、多くの作品で体験談を語る／聞くというスタイルを採用している。作者その人を思わせる「私」が登場して自らの体験を語る場合もあれば、「私」が出会った誰かの体験を聞くというスタイルが採用される場合もあるが、肝心なのは、そこで語られる体験談が、語り手が属する様々な制度に縛られた場に自らの位置を定めた上で語られることである。それぞれの語り手は、自らの体験の外部からではなく、内部から語ろうとするのである。このように考えてみれば、この「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」における、「仮定」された物語から「私」の体験談への些か強引な変更は、単なる語り手ではなく、作品世界内の諸関係を生きた存在へと「私」を変貌させるために必要な仕掛けだったと言えるであろう。

そして、このことは、所与の条件を絶対と見なす庶民的発想の限界を突くのではなく、それを一つの必然と見なし、その発想を汲み上げていった井伏文学を支える有効なシステムとして働いたと考えてよいのではあるまいか。

「私」が作中人物の体験談の聴き手として設定されている場合（たとえば戦後の作品であるが「山峡風物誌」などの場合）に「私」はどのような役割を果たしているか[5]、また、「遙拝隊長」のように「私」の登場しない作品における庶民的視点はどのような機構によっているのかなど検討すべき課題は少なくないが、それらについては、また、別の機会に譲りたい。

注（1）井伏の自伝「私の履歴書」（『日本経済新聞』一九七〇年一一月～一二月。のち、「半生記――私の履歴書――」と改題）では、郷里の呼称体系や、古風な「カカサン」という呼称に困惑した

ことなどに詳しく触れ、また、「自叙伝」（『早稲田文学』一九三六年五月～一二月。のち、「鶏肋集」と改題）では、東京弁を使う強盗のことへの言及が見られる。

（2）たとえば、小林秀雄「故郷を失つた文学」（『文芸春秋』一九三三年八月）も、この点を指摘していると考えてよいだろう。

（3）片岡懋「近代文学――何をどのように教えるか――」（『国語と国文学』三三巻四号・一九五六年四月）。郷里への郷愁を描いたとする「『槌ツァ』と『九郎治ツァン』は喧嘩して私は用語について煩悶すること」評が目立つが、ことばという象徴体系に縛られた人間を描いたとする平岡篤頼「井伏鱒二覚書き――記号の霎」（『早稲田文学』一〇三号・一九八四年一二月）とともに、片岡の論は注目すべきである。片岡は、歴史社会学派的な観点から、この作品が「民衆生活の種々相を描くと共に、田舎の生活と近代文化の関係を示してい」るとして、卓抜な作品分析を試みている。

（4）片岡、前掲論文。

（5）その一端については、拙稿「『炭鉱地帯病院』論――私小説的方法のパロディと言語コミュニケーションの問題から――」（『昭和文学研究』二七集・一九九三年七月）で触れた。